

シュメール語への手引

吉 川 守

編集子の要請でシュメール語の「入門講座」を書く羽目になったが、正直のところ、シュメール語は余り独習に適した言語とは言えない。アッシリア学から独立したシュメール学はすでに龐大な原資料と文献を有し、研究の飛躍的な進展とそれに伴う専門化は極めて較著であり、その成果を書物から短期間に、集約的に吸収することは不可能と思われる。従って以下の紹介は、シュメール学への比較的安全な出発点を示したに過ぎない。

I. GRAMMAR

- 1) Deimel, A., Šumerische Grammatik mit Uebungsstücken und zwei Anhängen, 2.Aufl., Roma (1939). (=ŠG)
- 2) Falkenstein, A., Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš, I (1949), II (1950), Roma. (=GSGL I, II)
- 3) -----, Das Sumerische, E.J. Brill, Leiden, (1959)
- 4) Jestin, R., Le verbe sumérien, I, II, III (1943, 1946, 1954). (=VS)
- 5) -----, Abrégé de grammaire sumérienne, Paris (1951)
- 6) Poebel, A., Grundzüge der sumerischen Grammatik, Rostock (1923) (=GSG)
- 7) Sollberger, E., Le système verbal dans les inscriptions "royales" pré sargoniques de Lagaš, Genève (1952). (=SVPL)

シュメール語学に最初の学門的な基礎を据えた Substantial な名著は上記(6)(Poebel, GSG)であり、同時代及びそれ以後の類書、水準に比して、その精緻な方法論は卓出している。この書は久しく絶版となっていたが、数年前に再版された。Otto Harrassowitz 書店(Wiesbaden, Germany)を指定して注文すれば入手できる筈である。

この正統に立つ Up-to-date な文法が上記(2)(Falkenstein, GSGL)である。素材的には Gudea 王 (Ca. 2100 B.C) の諸銘辞を対象とした Exhaustive な研究であるが、I の巻末には、グデアのシュメール語を三千年近いシュメール語の歴史の中に位置づけた Paradigmen が

附記されており、画期的な労作である。I は現在品切れで入手困難であるが、I、II を適切に要約した(3) Das Sumerische はシュメール語の輪郭を知るためにもっとも Handy な好著と言える。

この他に最近覆刻された(7) (Sollberger, SVPL) は、シュメール語の諸問題について諸説の紹介、批判的コメントが見られ、Bibliographical な利用価値がある。他の(1)(4)(5) 及び下に挙げる(8)、(9) は、多少とも詳しい研究を志す人のために必要なもので、慎重に使用する必要がある。

8) Christian, V., Beiträge zur sumerischen Grammatik, Wien (1957).

9) Scholtz, R., Die Struktur der sumerischen engeren Verbalpräfixe, Leipzig (1934). (天理大学図書館所蔵)

II. Lexikon/Glossary:

10) Deimel, A., Šumerisches Lexikon II (=Vollständige Ideogrammsammlung), Bde 1-4, Roma (1928, 1930, 1932, 1933).

11) -----, Šumerische Lexikon III/1 (=Šumerisch-Akkadisches Glossar), Roma (1934).

12) -----, Šumerisches Lexikon III/2 (=Akkadisch-Šumerisches Glossar), Roma (1937)

13) Delitzsch, F., Sumerisches Glossar, Leipzig (1914/1969).

シュメール学に於ける基本的な備品の一つに (10) Deimel, ŠL が挙げられるが、機形文字による検索を必要とし、初心者の利用には向かない。(11)~(13) はいずれもローマ字によって配列されているが、(11)、(12) は専門家向、最近再版となった(13) (=Delitzsch, SGI.) は Handy ではあるが可成りの新しい補足を必要とする。

III. Epigraphy:

14) Borger, R., Akkadische Zeichenliste (=AOATS 6), Neukirschen-Vluyt (1971)

15) Deimel, A., Šumerisches Lexikon I (=Šumerische, Akkadische und Hethitische Lautwerte nach Keilschriftzeichen und Alphabet), Roma (1930).

- 16) Jaritz, K., Schriftarchäologie der altmesopotamischen Kultur,
Eine grammatologische Untersuchung zur Entstehung des ältesten
Bilderschriftsystems, Graz (1967), 634p.
- 17) Labat, R., Manuel d'épigraphie akkadienne, Paris (1948), 326p.
- 18) Rosengarten, Y., Répertoire commenté des signes présargoniques
sumériens de Lagaš, Paris (1967), 185p.
- 19) Schneider, N., Die Keilschriftzeichen der Wirtschaftsurkunden
von Ur III nebst ihren charakteristischen Schreibvarianten,
systematisch zusammengestellt, Roma (1935), X+140p.

楔形文字に普通に見られる多音・多義性、機形文字テキストに於ける Logogram と Phonogram の併用、Spatio-temporal な書体の変遷など様々な障害があつて、独力で楔形文字の世界に入るのは、時間の空費が多いと思われるが、上に挙げた(17) Labat, Manuel は、楔形文字をウル期の絵文字からアッシリア時代の規格的な楔形文字まで、時代別、地域別に整理して採録し、シュメール語の音価とその語義がアッカド語と対訳の形で示されているため Glossary としても極めて便利である。残念ながらこの書は現在品切れ中で入手困難であるが、恐らく数年中には重版(第六版)される筈である。この代用には(15) Deimel, S. L. I が良い。Variants の記載に乏しいが、採録している楔形文字数は Labat, Manuel より多い。(18) は初期王朝時代の楔形文字について、(19) はウル第三王朝時代の楔形文字についてそれぞれ詳しい。(16) は実用には余り適していない。しかも高価である。

N. Text:

シュメール語入門の楔形文字のテキストとしては、国王銘辞(Royal inscriptions)が普通に使用される。

- 20) Sollberger, E., Corpus des inscriptions "royales" présargoniques
de Lagaš, Genève (1956)

この翻字翻訳に就いては、

Thureau-Dangin, F. Die sumerischen und akkadischen Königs-
inschriften, Leipzig (1907) ; Sollberger, E. & Kupper,
J.-R., Inscriptions royales sumériennes et Akkadiennes, Paris
(1971).

- 21) Gadd, C.J., Ur excavations, Texts I (=Royal inscriptions),
London (1928). (京都大学 文学部)
- 22) Kärki, I., Die Sumerischen Königsinschriften der frühaltbabylonischen Zeit in Umschrift und Übersetzung, Helsinki (1968)
楔形文字テキストなし
行政経済文集については枚挙に遑がないが、比較的新しくて、GlossaryとIndexの備った次のものが便利であろう。勝義の文字テキストはいずれも難解で初心者には向かない。
- 23) Grégoire, J.-P., Archives administratives sumériennes,
Paris-Paul Geuthner [1970].
- 24) Kang, S.T., Sumerian economic texts from the Drehem archive(= Sumerian and Akkadian cuneiform texts in the collection of the World Heritage Museum of the University of Illinois, vol.I), Urbana [1972].

なお、アッシリア学を志す者にとって下記(24)は Labat, Manuel と共に不可欠の伴侶である。

- 25) Borger, R., Handbuch der Keilschriftliteratur, I (=Repertorium der sumerischen und akkadischen Texte), Berlin [1967].

その他、シュメール語の系譜問題に就いては、

- 26) Christian, V., Die Sprachliche Stellung des Sumerischen (=Babyloniaca, XII/3-4), Paris (1931), pp.97-222.

がもっとも優れた導論となろう。